並行世界のラクライム

秋ノ君

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
並行世界のラクライム

【Ｎコード】
Ｎ８９４３Ｘ

【作者名】
秋ノ君

【あらすじ】
何気ない日常を過ごしていた佐照杏（さてるきょう）。日常に不満があるわけではないが、ここではない夢物語の世界に憧れを抱く。それは誰もが幼き頃に抱いた感情。御伽話やアニメ世界への憧れ。
２１歳の秋。突然の出来事により、生まれた世界を旅立つ。地球と並行に存在する世界で見つかる己の思い。その思いを成し遂げるために繰り広げられる仲間たちとの物語。

プロローグ（前書き）

この度、連載を始めました。若輩者ですが、良いものを書くために日々努力したいと思います。出来る限り良いものをお届けするために、更新は時間がかかると思います。

最後になりますが、この作品に興味を持って頂き、誠にありがとうございます。皆様の閲覧が私の血となり肉となります。これからも何卒ご愛好よろしくお願いします。

追伸

縦書きＰＤＦで読んでいただけると助かります。

プロローグ

世界。その定義は曖昧でだが、確かに感じる事ができる事象。
人々は己が暮らす空間を世界と呼び、その空間の中で喜び、幸せなどの様々な感情を抱く。人々は集まり、国という世界を作る。営利目的に人々は集まり、会社という世界を作る。はたまた、他人を好きになり、恋に落ち、家族という世界を作る。世界は多様に姿形を変え、並行に存在している。しかし、人々は世界に侵入するものを嫌悪し、恐怖を抱き、戦いを始める。どの世界であろうと変わりはしない。悲しい『世界』の性質。
その『世界』の悲しい性質を憂い、悲しむ者がいる。その者は異端と呼ばれ、多くの人々に蔑まれた。それでも、『世界』のために戦い続け、戦いの末に命を落とした。
近い様な遠い世界の話。あなたの世界の隣で繰り広げられる世界の話。

第1話

ドアをゆっくりと開く。ドアの隙間から差し込む光に眼を細める。吹き込む風が喉を通り抜け、全身の細胞一つ一つの活動を鈍くする。体を巡った空気は白い水蒸気となり、再び空に戻っていく。

「冬もすぐそこまでやってきているな」

７０度くらいは角度のありそうな急な階段を降りていく。カツン、カツン　と靴の音が澄んだ空気に響く。雪が積もると、この階段は天然のスケート場に変わり、毎年何人もの悲鳴を生む。

ここは日本のとある街。俺は大学に通い、家賃3万3千円の7畳ロフト付のアパートで暮らしている。特に取り柄があるわけではないが、全ての事に対して上の下ほどの成績を残してきた。比較的出来る人として、周囲の人達からは頼られる機会も多い。

家を出ると周りには多くのアパートが立ち並ぶ。綺麗で洋風のお洒落な建物もあれば、いかにも幽霊が出そうな寮など様々な品揃えだ。坂道を下るとそこには集会場があって、週末には良く地域の子供たちが集まって、懐かしい遊びをしている。

いつもと変わらない通学路。いつも聞いている音楽を口遊(くちずさ)み、アスファルトで固められ道を歩く。ここが小説の世界もしくはゲームの世界ならば、いきなり次元のゆがみに捕らわれ、別世界に飛ばされる可能性もなくはないだろう。

そんな非現実はないと知りつつも、思いは膨張する。その世界の郷に従って暮らしていくのは、どの様な気持ちなのだろうか。きっと、友人や家族のいない世界で生きていくのはとても辛いだろう。それにもかかわらず、物語の主人公とはたくましいもので、まっ。どうにかなるか　こんな感じで何の抵抗もなく、その世界に溶け込んでいく。その世界自体に現実味がないのだが、その非現実的な

世界に憧れを抱く。
信号が赤に変わり、空を見上げ途方もない考えを巡らせる。学校、友人、好きな女の子、将来の夢。遠い未来に思いを馳せる。信号が赤から青に変わり、歩み始める。その瞬間、世界が反転して体の重力を失った。
「見つけた」
どこから聞こえたか正確に判断できない一言とともに、意識が闇に包まれていった。

在りはしないと信じていた非日常。刻々と俺の日常は終わりを迎えていた。

●

目の前が明るくなった。見渡せばさっきまでのアスファルトに囲まれた光景とは一遍し、緑に囲まれていた。森ではなく樹海というのが正しいのだろうか。木には幾重にも蔦(つた)が巻かれ、その隙間から樹皮がこちらを覗く様に顔をのぞかせている。地面には真紅の花を咲かせた植物や見たことのない緑葉植物で覆い尽くされていた。
「そんなアニメや小説の主人公でもあるまいし、そんなわけないよな」
あまりの出来事に頬をつまむが、痛みを感じた。実際に頬をつねる場面なんてあるのだな　と感嘆してしまった。
「あら。その考えはあながち間違いではないと思いますわ」
その柔らかな声に驚き、瞬時に後ろを振り向く。そもそもこんな森の中に人が居るのか疑問に思ってしまった。
「そんな恐い顔をして、こちらを見ないでくださいますか」
上品な顔立ちに腰まである金色の髪。白いワンピースに身を包んだ女性が凛と立っていた。処々に施された金刺繍が高貴さをより表現している。初対面の印象は素直に美人と思えた。しかし、一般的

なヒトとは違う点があった。
「その耳の形。君は人間なのか」
彼女の耳は横に細く尚且つ先端が尖っていたのだ。
「私は人間ではありませんわ。私はエルフですの」
「エルフ？あの童話や仮想世界で出てくるエルフだって！？」
驚愕の事実に腰を抜かしそうになった。確かに耳を見た瞬間、にわかにそうではないかと感じたが、その現実を受け入れたくなかった。普段と変わらない日常だったはずが、急に目の前に、エルフです　と言う人がいて、　はいそうですね　と返せる可能性はゼロに近い。しかし、その現実逃避も束の間だった。
「あなたが想像している通りのエルフですよ」
満面の笑みでそう言った。なぜそんな屈託のない笑顔を向けてくるかわからなかった。俺の心情は無視され、更に言葉がこぼれる。それよりもこちらの心が読めるのか。
「ちなみに、あなたをこの世界に呼んだのは私ですわ」
静かな森にその言葉が染み渡っていく。静寂が二人の間を支配したが、恐る恐る口を開く。
「なぜ、俺をこの世界に呼んだ？」
「なぜって言われましても。あなたは元々はこの世界の住人だったのですが、やはり覚えてらっしゃらないですか」
再び考えていた回答とは違う答えだった。真逆というよりは的を射てないとさえ感じた。だが、その女性は真剣な面持ちで思案していた。
「パラレルワールドってご存知かしら。世界は決して一つではないのです。様々な世界が並行的に存在していますが、ただ行き来や存在を直接確認できませんので、一般的には認知されていませんわ」
「パラレルワールドは知っている。物理法則的には存在し、俺はその存在を信じていた」
実際に信じている。現実の中で非現実に憧れを抱く青年には、いい現実逃避の題材でもあった。一時は、大学や国の図書館に足繁く

通い、一連の本を耽読した。俺の言葉を聞くなり、女性の顔は明るくなった。

「それなら話は早いですの。この世界は、ファフニール。あなたが以前暮らしていた世界は、地球（エルテ）と呼ばれていますわ」

彼女は続けた。

「先程申しましたように、僭越（せんえつ）ながら私がこの世界にあなたを呼ばせて頂きました。申し遅れましたが、私の名前は、アイ・カムエル。アイとお呼びになってくださいまし。えっと……」

そこで言葉が詰まり首をかしげた。どこの世界でも悩み方は変わらない。アイは両腕を組み片手を頬に当て、うーん　と唸っている。暗い顔に花が咲いた。

「そういえば、お名前を伺っていませんでしたの。お聞きしてもよろしいでしょうか？」

そういえば自己紹介もしていない事に気付く。己の動揺と混乱を実感し、少し気恥ずかしくなった。おそらく、誰であろうと、このよう非日常な状況に遭遇すれば同じはずなのだが。

「俺の名前は、佐照（さてる）　杏（きょう）」

これが彼女との出会いだった。

●

「……杏。そうでなのですね。そういうお名前なのですの」

頬に手を当て、目を細めている。なぜ上機嫌なのか疑問にも思うが、以前の俺との関係が気になる。尋ねる間もなく、アイが続ける。

「あなた様は遥か昔この世界に住んでいましたの」

それからアイの話は１０分ほど続いた。ファフニールには国が３カ国ある。古よりの歴史が残る『ベタス』、天の恵みに満ちた『カレム』、科学で技術の発達した『サンテ』。現在も国同士の力は拮抗していて緊張状態である。ちなみに、俺達がいるのはカレム北東部に位置する『緑の楽園～リデ・ルタス』だそうだ。一番の衝撃だ

ったのは。
「えっ！？　俺がその戦いで死んだのか！？」
「申し訳ありません。私たちに力がないばかりに。ですが、今度はきっと守りますの」
「どうしろというんだ！？俺にその記憶はない。……今更。今更、俺には関係ないじゃないか！！」
自然と口から言葉が出ていた。静かな森に罵声が響き渡り、数羽の鳥が飛び立った。俺が戦死し、再びその世界に戻ってきた。なぜという疑問が頭を駆け巡る。
「もう一度戦えというのか？何も覚えていない、戦う理由のない、この俺に！！お前達の勢力争いに加担しろとでも！？」
次から次に言葉が出てくる。アイは口を噤(つぐ)み、黙って聞いている。それが何を言っても無駄だと言われている気がして、余計に腹立たしかった。
「何か言ったらどうだ！！」
結果、こんな単純な言葉だった。最低だ。一方的に相手の非を並べ、正論攻め。俺の一番嫌いな短所。愛想をつかされただろう。恐る恐るアイをみるが、彼女は笑っていた。
「前世のあなたが言った通りになりましたの。ですが、ご安心なさって下さい。これをあなたに渡すように前世のあなたから仰せつかっていますの」
彼女の手には8つの剣が交差したシルバーアクセサリーが握られていた。それを俺に差し出し、受け取ってくださいの　と笑顔で伝える。恐る恐るそれを受け取り、目の前に掲げる。その精巧な作りと、銀の輝きに見惚れてしまった。次の瞬間、ペンダントから光が放たれ、あまりの眩しさに瞼を閉じた。
瞼を開けると違う場所にいた。雪が積もった冬の朝の様に辺り一面真っ白で、どちらかが上で下なのかもわからない。自分が立っているかさえ認識できない浮遊感に宇宙空間を彷彿した。

「なぜ争う？なぜ戦う？国が大事か？」
声が聞こえた。厳格で重々しいが、どこか優しい声。
「誰だ！？」
「そのためには人の死は必要不可欠なのか？大切な人を失い悲しむのは誰だ？お前はそれを見過ごすのか？自身の世界に逃げ込んだままか？」
「こっちの話を聞けよ！お前は誰なんだ？ここはどこなんだ？」
沈黙が空間を支配する。どこまで続いているかわからない先を睨む。
「……わからない。戦争さえ経験したことがない」
「では、質問を変えよう。きさまは家族や友人の死を見て見ぬ振り出来るか？」
「出来るわけないだろ！！」
即答だった。誰であろうと身の回りの不幸を望みなどしない。実際、祖父母の死は大きな悲しみを生んだ。
「では、他人の死は平気なのか？世界が悲しみに満ちているのを見過ごせるのか？」
「……出来れば、出来れるならば救いたいさ。救える命なら救ってやりたい。それが普通だろ？だけど、今の俺に何が出来るというんだ！？何の力もない。前世の記憶すらない俺に」
人の不幸を見過ごせるほど悪党にはなれない。困っている人を助けたい。俺だって困った時は、誰かに助けてもらいたい。そうやって輪を作り、世界の住人になり、悲しみの世界を作りたい。
「きさまなら出来るさ。きさまは我なのだからな」
「お前が！？」
「我が名の下に命ずる。我が力を今これより以って、きさまに継代す」
「ちょっと待ってくれ！！俺は何をしたらいい？」
声が遠ざかっていく。まだ聞きたいことはたくさん残っている。追いかけようにも体が上手く動かない。

「好きにするといい。救いたいのなら救え。守りたいのなら守れ。汝の気の向くままに力をふるえ」

気付けば先程の森に戻り、俺は木に寄り掛かって座っていた。

「……俺の守りたい者を守れか」

悪くはない。確かにそんな感情が芽生えていた。顔を上げると、満面の笑みのアイが眼に入った。アイは常に笑っている。それがなぜだか心地よかった。

「おかえりなさいませ。いかがでした？」

「前世の俺なのかな。そいつと話をしてきた」

「それであなたはこれからどうなさるつもりですの？」

目を閉じ呼吸を整え、台風の様に渦巻いていた感情を整理する。一つの決心を胸にゆっくり目を開け、アイの眼を真っ直ぐ見る。海の様な青い瞳に吸い込まれてしまいそうだ。

「俺に守れる者がいるなら守りたい。守れる力があるかはわからない。だが、戦いが原因で悲しむ人がいるなら助けたい！！見て見ぬ振りはできそうにないよ」

アイは大きく頷き、手を差し伸べてくれた。

「あなたならきっと出来ますよ」

その言葉が心強かった。

「ありがとう」

アイの手をしっかり握りしめ、体を起こす。この世界に来た時は右も左もわからなかった。今も何も理解できないが、それでも心の中に一つ揺るぎない意思が生まれた。手を空に向けて伸ばす。

「俺はこの世界を変えたい」

深い緑の森に風が吹き抜け、木々が揺れ、一筋の光が差し込み少年を照らす。その光景は青年の新たな旅立ちを後押しているようだった。

第2話

鳥のさえずりが森の中に木霊する。左右には4階建てのビルに匹敵する木が立ち並び、木々の隙間から微かに陽の光が零れ落ちてくる。その眼下を二人は歩いている。

並び歩くアイに尋ねる。

「聞いていなかったが、これからどこに向かうんだ？」

アイは人差し指を顎にあて、少し間をおいて答える。

「一先ず、杏様の家を目指しますの。……杏様の家といいましても、前世のあなたの家なのですが」

家という言葉に思わず体が反応してしまった。アイは手を後ろに組み、前屈みになり、覗き込むように見上げて微笑んでいる。アイが揶揄しているのがわかり、恥ずかしくなって目を逸らした。いや、違うか。その笑顔が可愛かったからだと気付いた。しかし、帰る場所があるという事実は、心に小さな羽を生じさせた。

「そんな顔でこっちを見るなよ。恥ずかしいじゃないか」

その一言でアイは更に上機嫌になった。囁く声で、今度の主は可愛いですわ　とニヤニヤしている。大きく一息深呼吸し、話題を変える。

「家に向かうのは分かった。具体的にはどの様な経路で向かうんだ？」

アイは少し悩み、夜になると光り輝く街灯の様に顔がパッと明るくなった。左手を眼前の空間を撫でるように右から左に動かす。そうすると、目の前にパソコンの画面の様なディスプレイが生じた。

「えっ！？一体何をしたんだ！？」

その問い掛けにアイは眼を丸くし、キョトン　としている。その姿からアイにとっては当たり前の事だとわかる。

「だから、その画面は一体どうやってアイの前に生じたんだ？」

アイは手を、ポンッ　とついた。
「これは魔法の一種で、魔法名をレプラといいますの」
魔法。本や伝承の世界のみで使われる不思議な力。誰もが一度は憧れる力。
「……魔法か。俺にも使えるのだろうか？」
左手を握りしめ、その拳を見つめた。誰かを守りたいと願ったが、果たしてそれを実現できるのか改めて不安になる。
「きっとすぐに使えるようになりますの」
不安そうな顔していたのだろう。アイが優しく微笑んでくれた。
「では続けますの。これがファフニールの世界地図なんですの」
飛び出す絵本の様に立体的な映像が浮かび上がった。その地図を見て、喉に魚の骨が刺さっているような感覚に見舞われた。
「緑の楽園。リデ・ルタス」
しかし、思い出す前にアイの言葉に呼応し地図が拡大され、全体像がわからなくなった。画面の中央には、アイに似た小さな人形が表示されている。
「ここが今私たちがいるところです。次に向かうのは、この街です」
人形が森を抜け、目的地の街らしき建物まで動いた。口がファスナーの壊れたズボンの窓の様に開いたままになる。俺の世界にもＡｎｄｒｏｄｏｒｉｄ　という携帯に地図の機能があったが、この魔法はその機能をはるかに上回る技術だろう。
「この様に森を抜けて街道に出れば、一本道ですので迷う事はありませんわ」
アイが手を叩くと、目の前の画面が消えた。それが合図となり、再び歩みを進める。
相変わらず草木がうっそうと茂った森を歩いている。時折茂みが揺れ、その揺れに心音が同調し、シャツが背中に張り付くのを感じる。

「大丈夫ですの。この森に凶暴な魔物はいませんので」
その後に何かを続けたが聞き取ることができなかった。しかし、相変わらず俺の心を見透かしてくる。それほど顔に出る方ではないと思うのだが、アイにはわかってしまうのだろうな。
「そうか。ありがとう」
アイの一言で緊張がほどけ、肩の力が抜けた。アイといると不思議と心が穏やかになる。理由を確信できないが、流体が体に流れ込む様に俺の心に沁み込んでくる。
しかし、そんな穏やかな空気も束の間だった。

「っつ！！」
急に視界が９０度上方に回転し、後頭部に痛みを感じる。周りを確認すると草の中に埋もれ、アイが覆い被さっていた。
「急にどうしっ！？」
声を荒げたが、すぐに口を手で塞がれた。急な出来事に静寂を取り戻したはずの鼓動が再び激しくなった。落ち着く間もなくアイに手を引かれ、木の陰に隠れる。
「……何者かに狙われていますの」
その声はいつもの陽だまりの温かさではなく、冬の夜の冷たさを帯びていた。アイは木陰から周りを見渡し、唇を噛み締めている。
「少々面倒な事になりましたの。敵の数がわからない以上、迂闊には動けませんし。こんな時に彼女が居てくれれば」
生唾を飲み込み込もうとして気付いた。あまりの緊張に口は砂漠の様に乾いていた。
「安心してください。杏様はここにいて下さい」
そう告げるとアイは木陰から飛び出した。

●

「一体どこの兵ですか。久方ぶりにあのお方に会えたというのに、

雰囲気が台無しですの！！」
飛び出した同時に出た言葉は煩わしさで満ちていた。前方から5本の矢が向かってくるのを確認する。
「ローナ！行きますよ！共鳴（シンフォニー）」
3等身の人形が何もない空間から飛び出し、アイの周囲を飛び舞り、胸元に溶け込んでいった。それと同時に光の粒が舞い、腕と胸、脚の局所に集まり、空色の鎧を創り出した。
目前まで迫った矢に対して、無防備に右腕を付きだす。すると空中で矢が半分に折れ、重力に従って地面に落下した。
「さぁ。私たちの再開を邪魔した罪は重たくってよ」

●

異世界に来て、魔法を知って、わかったつもりになっていた。俺にも出来る事があると信じていた。しかし、目の前の戦闘を見て、足がすくんだ。心に恐怖という花の種が植えつけられていく。怯える自分とは裏腹にアイは華麗に戦っていた。

アイの目前の茂みから男が飛び出し、横腹を狙った斧が横一線するが、宙に飛んで回避した。アイを追うように、その男の影に隠れていた男が背中を踏み台にしてアイより高く飛び上がり、剣を振り下ろす。
「そんな攻撃では届きませんの」
アイは嘲笑交じりに剣に向かい左手を突き出す。剣が見えない何かに折られた。すかさず右拳を振り下し、男が地面にたたきつけられた。しかし、アイの死角から再び飛び出す影があった。
「これで！！」
槍を持った女がアイ目掛けて突撃する。しかし、身を翻し、両足で空を蹴り、女に向かっていく。その結果、攻撃のタイミングがずれ、逆に返り討ちにする。鳥が水面に着陸するように、音を立てず

にアイは華麗に地面に舞い立つ。
「久しぶりの戦闘でどうなるかと思いましたが、私もまだまだ捨てたもんじゃないですの」
久しぶりの闘いには見えなかった。蝶が障害物を避けるように、その後もアイは次々に襲いかかってくる敵を回避しながら、追撃を与え、撃退している。
思わず拳を強く握りしめ、手のひらに突き刺さる爪の痛みを感じる。女性に守ってもらっている事実が心に雲を生み、それが集まり固まって一抹が出来た。自分に力がない事も、戦い方を知らない事も十分承知しているが、同時に助けたいという感情も生まれていた。その感情に気付いた時には木陰から飛び出していた。
「アイ！！俺も一緒に戦う！」
眼に映ったのはアイではなく、甲冑に身を包んだ剣士が振り下ろす刃が視界を占拠する。
「――！」
しかし、刃が身を切り裂く痛みを感じなかった。視界に映ったのはアイの背中。両手を交差させ、剣を受け止めていた。剣を弾き上げ、無防備になった剣士のあごを目掛けて拳を叩き込む。
「大丈夫ですか！？」
怒りと安堵が入り混じった声に己の行動の浅はかさに気付く。結局、俺には何も出来ない。力さえない。誰一人守る事さえできない。むしろ守られている。
「すまない」
「……退っていて下さいの」
同時に腹に衝撃を感じた。アイに蹴り飛ばされ、無理矢理退避させられたのだ。

●

アイは唇を噛んだ。大切な人を守るためとはいえ、蹴り飛ばした

事実は消えはしない。
「後で謝らないといけませんの」
横目で蹴り飛ばした主を見る。怪我をしていない事に安堵するが、顔を見るのは酷く辛かった。先程の一言は心の底から嬉しかった。震える足を抑え、怯える心を鼓舞し、飛び出してくれた。胸にその優しさが染み渡る。私はその優しさに行動で応える。
「慈愛の聖弓（カリティス・サクアル）」
手に身の丈ほどある白銀の巨弓を握る。
「調子に乗りすぎですのよ。穏便に済ませようと思っていましたのに、我慢の限界ですの。光矢（サクタ）」
野球バットに匹敵する光の矢を手に弓を構え、弦を引き絞る。不意に懐かしい感覚に襲われ、頬が緩むのを感じた。
「総攻撃ですか。賢明な判断ですが、私はあの方のいく道を守ります」
手から矢が離れ、空を切って一直線に飛ぶが、その先には誰もいない。その間にも敵との距離は縮まっている。
「私の愛を受け取ってくださいですの。慈愛の伝導（ラ・ディフシオ）!!」
一本の矢が複数の矢に分裂し、その一つ一つが獣の様に敵を追いかける。
「盾で防ごうとも無駄ですの。私の愛は必ずあなたに届きますの」
生きているかの如く盾を避け、敵を射抜く。放たれた矢はひとつも外れることなく、敵を射抜いていく。必死に防ごうとするが、どの様な行動もアイの攻撃の前には無駄であった。
「……それにしても、大勢隠れてらしたのですね」
溜め息交じりに目の前に倒れている敵を見渡す。
「ですが、雑兵が何人集まろうとも所詮は雑兵ですの。大人しく引いて下さるなら命は頂戴いたしませんので、速やかにご退場願いませんか」
蜘蛛の子の様に散り散りに逃げていく敵の背を確認して、安堵する。だが、一つの疑問が浮かんだ。

「あれほどの兵がいたにもかかわらず、隊をまとめる者がいませんでしたの。……気のせいだといいのですが。それよりも今は杏様ですの」
今回の戦闘で得心しましたの。後ろで待つ主の元へ駆け出す。
「あの方は昔と変わらず呆れるほど優しいですの」
その声は無邪気な子どものようだった

●

俺はただ傍観しているだけで、アイによって敵は退却した。安堵から足に力が入らなくなり、地面に尻をつく。結局、俺は影で隠れている事しか出来なかった。死なずに済んだという安心感と何もできなかった無力感が心中をかき乱す。
「杏様。お怪我はありませんか？」
駆け足で俺の元にやってくるアイが見える。すでに身を守っていた鎧は姿を消えているが、いつものひまわりの様な笑顔ではなかった。そして、俺の前に来ると同時にアイの腰が折れた。
「無礼な真似をお許しください。誠に申し訳ございませんでした」
暗い顔をしていた理由がわかった。様付けで呼ぶくらいだから、蹴り飛ばした事に引け目を感じているがわかった。アイがそう感じているなら、やるべきは決まっている。
「いや、謝るのは俺の方だ。隠れていれば、あんな事態にはならなかった。すまなかった」
負けないくらい頭を下げた。
「えぇぇですの！？　杏様、お顔を上げてくださいまし。杏様に落ち度は全くありませんですの」
「俺は勘違いしてたんだ。新しい世界に来て、浮き足だって、守れると勘違いして。その結果があれだ」
「そんな事はありませんの。杏様はそれでも飛び出してくれました。恐くて仕方なかったはずにもかかわらず、私を助けたい一心で。

私は、その気持ちがとても嬉しかったですの」
アイは冬に照り輝く太陽の様に本当に温かい存在。俺の自責の念も彼女前では次々に溶かされてしまう。
「恥ずかしいから、そんなに人の感情を読まないでくれ」
「うふふ。本当に杏様は可愛らしい方ですの」
顔が赤くなるのがわかった。隠れる穴があったら入りたいぐらいだ。
「よしてくれよ」
「仰せのままに」
相変わらず、にやにや笑っているのが目につくが、今はその仕草でさえ俺を安心させる。
「話は変わりますが、今日は疲れたでしょうから、この辺りで野宿にしましょうか」
「アイがそういうなら、それが正解だろう？アイに任せるよ」
「ええ。ありがとうございますですの」
それから1時間ほど歩き、大きな大木の下で野宿をする事になった。

第3話

朝日が葉の隙間から零れて、森の中を明るく照らしている。相変わらずアイは朝から長い髪を揺らしながら、跳ねるように歩いている。隣を歩く俺はそれとは対極の表情だろうな。……昨晩は人生初の野宿を体験した。

「ふぁあぁぁあ」

口から情けない声が漏れてでた。眠い目を擦り、天に向けて手を伸ばし、固まった体を伸ばす。

「あら、やはりよく眠れませんでしたのね」

「……まぁ……それはあんな体験……・初めてだったからな……」

首を捻ると、ボキッボキッ　と音が鳴った。瞼を閉じ昨夜を思い出す……。

「……アイ。近すぎじゃないか」

横を見ると、アイが肩にもたれ掛っている。

「近いって、何が近いですの？　教えて頂けると嬉しいですわ」

この顔はからかっている時の顔だな。

「……だからだな。もうちょっと離れてくれないか？」

「寒いので、それは無理なお願いですの」

即答だった。俺が恥ずかしがるのを良いことに、アイは目を糸の様に細め、肩に頭をぐりぐりと埋め込んできた。髪の毛が顔にあたり、いい匂いが脳を支配していく。嬉しいか、嬉しくないかでいうと、嬉しいに決まっているさ。

「杏様こそ、嬉しいと顔に出ていますよ。私は……このままがいいです」

いつものおどけた声とは異なり、しっとりした声艶にさらに俺の心臓は高鳴った。

「……アイはずるい女だよ……俺の負けだな」

「ふふふ。ありがとうございます」
結局寄り添うような形になった。見上げると、わずかだが木々の隙間から星が見える。
「……あのさ。昔の俺ってどんな感じだったんだ？」
前世。今まで意識した事さえなかった以前の自分。少しその姿と向き合いたくなった。
「凛とした方でしたの。私たちにも優しくて、いつも笑顔の絶えない、本当に優しい過ぎるお方でした」
アイの目じりに光る何かがあった気がした。
「優しいか……アイは好きだったのか？」
自分でも何を聞いているのかと不思議に思ったが、何となく聞いてみたかった。アイは目を閉じたまま答えてくれた。
「……えぇ。とてもお慕い申していましたの」
その言葉に少し心臓が跳ねた。アイが、好き　と言ったことに対して不快になった事は事実だが、口が裂けてもそれは言えない。しかしだ。俺がそんな事を考えていて、隣のエルフが気付かないわけがなかった。
「杏様、もしや嫉妬ですか？」
案の状、俺を見上げて問い掛けてきた。というか、顔が近い。もう少し近づけば唇と唇が重なるほどに。
「――それもあるかもしれないな。それよりも……俺もそんな人間になれるのか少し不安にもなったよ……そういえば、俺の前世の名前を聞いていなかったな」
「それもそうですね。あなたの前世の名前は、『ソレア・ソレミニ』。ちなみに女性だったのですよ」
「それが俺の前世の名前なのか……覚えておくよ。教えてくれてありがとうな、アイ」
アイは頷き、目を閉じた。前世が女だったのは少し戸惑ったが、それならアイの『好き』という言葉も胸にすとんと納まった気がした。

「ソレア様は女性ということもあって、思うようにからかえませんでしたので、覚悟しておいて下さいですの」
寄りかかるアイが独り言のように呟いた。
「あぁ。お手柔らかに頼むよ」
アイは微笑むとそのまま静かになった。
不思議な事に、今日来たばかりの世界にもかかわらず、どことなく懐かしい気がする。初めての野宿とアイのおかげで緊張はしているが、それでも、旅行で海外に行った時ほど不安ではない。
「本当に、ここで生きていたんだな……」
そう実感せずにはいられなかった。自分のいた世界の両親が気にならないかと言われれば否定はできない。ポケットに手を入れ、携帯を確認するが、暗闇にぼんやりと光る画面には案の定、圏外とう文字が表示されていた。アイを起こしてもいけないから、活発に活動している小さな脳を落ち着かせ、ゆっくり瞼を閉じた。

……思い出しただけでも恥ずかしくなってきた。
「あら、そんなに嬉しそうな顔をされても困りますの」
「アイこそ、あからさまに頬を染めて、照れる振りをしなくても」
「いえいえ。ソレア様と違って、杏様は男性なのですから、これは振りではないですのよ。昨晩、一緒に寝てわかりました。この気持ちは……ソレア様に対して抱いていた感情とは……」
頬を上気させているアイは見とれてしまうほどに、本当に可愛かった。静かな沈黙が二人の間を取り巻く。
「杏様、そろそろ森を抜けますの」
口火を切ったのはアイだった。確かに周りを見渡すと、今までとは異なり、草木の高さが低くなっている気がする。
「次は街に向かうんだったよな？」
「その通りですの。森を抜けた先にある『アルクアム街道』を進むと、目的地の『ロゼイド』に到着しますの」
そう言え終えると、アイが急に走り出した。

「杏様、早く来ないと置いていきますのよよ」
身を翻し、純白のワンピースがひらひら舞う。俺を誘うその姿は、まるで森に住まう妖精のようだった。見惚れてしまったため、出遅れてしまった。
「待ってくれよ、アイ」
俺も負けじと走り出し、前を走るアイの背中を追う。飛び出した木の枝を避け、足元に転がる大木を次々に飛び越えて、アイを目指す。中学校の体育祭の障害物競争を思い出した。俺とアイとでは、その華麗さは雲泥の差で、どんどんアイの背中が遠くなっていく。
「前から思っていたけど、アイって運動神経良過ぎじゃないか？」
「これは日頃の修行の賜物ですの。杏さまにも修行してもらいますので、覚悟してください」
くすっ　と笑って、更にスピードを上げていく。その小さくなる背中を追いかけるために、地面を力強く蹴る。
「……俺も強くなりたいからな。修行は望むところだ！」
「ふふふっ、それは楽しみですの。ビシバシ鍛えて差し上げますね」
その言葉に何となく恐怖を抱いたが、今は気にせずにいよう。だが、どんなにきつい修行でも耐え抜こう。何も出来ないなんて嫌だから。
ふと前を見ると、アイが光に包まれていった。その光は歩みを進めるごとに近くなっていく。横たわる木を飛び越え、光の中へと飛び込む。同時に葉がすれ合う音がした。
「――――！」
目の前の光景に言葉を失った。
「……綺麗だな」
見渡す限り緑。綺麗なライトグリーンの海のようだ。昔、アメリカに留学していた際に映画に出てきそうな広大な草原を目にしたことがあったが、それとは比べものにならないほど綺麗だ。
「綺麗ですわね。『アルクアム街道』、見ての通り、新緑の街道

という意味ですの」
「よく見れば道もあるな。というか久しぶりに陽の光を浴びた気がするよ」
走ったこともあって、そのまま後ろに倒れこむと、ベッドのような柔らかい反発を背中で感じる。
「なぁ、アイ。日の光はこんなにも気持ちいいんだな」
風が草原を駆け抜け、緑の波が出来る。横を見ると、アイは一糸乱れぬ姿で立っていた。風になびく金色の長い髪が光を通し、綺麗に輝いている。
「そうですね。お昼寝にはもってこいですの。膝枕でも致しましょうか」
「さすがにそれは恥ずかしいから、遠慮しておくよ」
断ったつもりなのだが、頭の近くに座り膝を叩いて俺を誘っている。
「――？」
気付くとアイになされるがまま、膝枕をして貰っていた。
「――――ちょっ！アイ！恥ずかしいから、やめてくれって言っただろう……」
「いいではないですか。別に減るものでもないですし、それとも杏様は私の膝枕では不服ですの……」
そんなに悲しげな顔をされると断るにも断れないじゃないか。
「……不服ではないです。むしろ嬉しいくらいです」
「ありがとうございます。ではもう少しこのままで休憩しましょうか」
空を翔ける白い水蒸気の塊を見つめる。どんな世界でも空と雲は変わらずに存在した。青い空はオゾンの色、それは生物が住んでいるという証拠であり、この世界も多くの人々の営みが複雑に重なり合って、出来上がっているのだ。
「さぁ。行こうか」
アイの膝枕とはさよならして、アイに手をさし延ばす。

「了解ですの。では、『ロゼイド』に向かいましょう」
俺の手を掴み、勢いよく立ち上がり、何かを口にした。聞こえたが、聞かなかった事にしよう。ああ、俺は何も聞いていないし、アイは何も言っていない。
「杏様。しらばくれても無駄ですの。先ほど伝えた通り、修行の一環として、走りますからね」
満面の笑みであった。
「確認までに聞いておこう。ロゼイドまでは距離にしてどれくらいなんだ」
「ざっと、十二メルキルなので、杏様の世界だと二十キロメートルだったと思いますの。ですが、準備運動に丁度いい距離ですね」
「―二十キロ…」
「おしゃべりでもしながら走っていれば、すぐに到着しますのよ。では、行きましょう」
「……おぉ」
街についた時には、俺の膝が笑っていた事は説明する必要もないだろう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8943x/

並行世界のラクライム

2011年11月30日00時57分発行